



Title	Essays on Frictional Labor Markets
Author(s)	川田, 恵介
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59113
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【4】

氏名	川田 恵介
博士の専攻分野の名称	博士（経済学）
学位記番号	第 25433 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 経済学研究科経済学専攻
学位論文名	Essays on Frictional Labor Markets (摩擦が存在する労働市場に関する論文)
論文審査委員	(主査) 准教授 佐々木 勝 (副査) 教授 大竹 文雄 准教授 佐藤 泰裕 教授 二神 孝一

論文審査の結果の要旨

川田氏の論文は、サーチ理論の枠組みを使って技能蓄積や転職行動などの労働経済学のトピックから実験経済学、そして都市経済学のトピックまで幅広く取り組んでおり、非常に優れたものである。これまでの研究では見落とされた部分、わからなかった部分を補った分析をしたところが貢献であり、博士論文としての価値があると判断する。

論文内容の要旨

本博士論文は、摩擦的労働市場に関する考察をまとめたものである。第2章では、労働者の技能蓄積に関する理論分析を行った。労働市場におけるサーチフリクション、産業特殊人的資本を導入し、労働者は訓練によって各産業に関する人的資本を蓄積するモデルを構築した。分析から、労働者が単独で人的資本蓄積を行う場合に比べ、労使が話し合って人的資本蓄積を行う場合は初職の産業特殊人的資本を多く蓄積することがわかった。社会厚生の観点からは、労働者が単独で人的資本蓄積を行う場合は、初職の産業特殊人的資本は過少であるのに対し、労使間で話し合い人的資本蓄積を行う場合は過剰になることを明らかにした。

第3章では、実験室実験によって、サーチモデルに関する最新の理論仮説を検証した。具体的には、Albrecht, Anderson, and Vroman (2010 Journal of Economic Theory) による「集団で意思決定する場合は、単独で意思決定を行う場合に比べ、人々は妥協しやすくなり、サーチ活動を早く終わらせるこを望む」という理論仮説を検証した。得られた結果は、理論仮説を強く支持するものであった。実験室内でも、3人一組でグループを作りサーチ活動を行う場合は、単独で行う場合に比べ、サーチ活動を早く終了させることを好み、被験者が獲得したポイントも低下した。

第4章では、労働市場と都市構造の関係に関する理論的な考察を行った。特に労働者の都市における居住地選択と、労働者の求職、転職活動の関係を分析し、労働者のキャリアパスと居住地の変遷の相互依存関係を明らかにした。例えば、失業状態から就業状態へ移行し、その後転職活動を経てより好条件の職へ移動する、というキャリアパスを辿った労働者の居住地の変遷は、「最初は都市の外延部に住み、その後都心に移動し、最後に外延部と都心の中間地点に居住する」というものになることを明らかにした。

第5章では、労働者の転職行動の効率性について理論的な考察を行った。既存研究との大きな違いは、労働者の状態の確率的な変化、それに伴う企業との相性の変化を導入した点である。モデルの帰結として、以下を得た。(1) サーチフリクションの存在により、一部の労働者は相性の悪い企業に留まることを選択する。(2) 社会的に効率的な水準よりも、転職者数は過少になってしまう。